

小さな勇者
のRPG

ウタカゼ

ミル 1

『ウタカゼの使命』

作：北村貴大

そよ風が吹き、木の葉がカサカサと音をたてる。

ここは歌風の龍樹から東に進んだ所にある森。果物や木の実がたくさん採れ、僕たちコビット族の遊び場でもあり、狩場の一つでもある。

「よしっ、こんなところかな」

袖で汗を拭い、僕は木の幹に背中を預けた。手にしたかごには、栄養満点のキノコや果物がたくさん。夕食のシチューにキノコを入れれば、すごく豪華になりそうだ。

突如、一本の木からシマリスがひょっこりと顔を出した。

「こんばんは、コビット族の勇者さん」

「あ、リス族さん」

頬袋の中にどんぐりを詰め込み、ゆっくりと喋るリスさん。頬袋の中

が空っぽだと僕たちには聞き取れないくらい早口で喋る、ちょっぴりせっかちな所があるんだ。

「勇者さん、もうすぐ暗くなるから早くお家に帰った方がいいですよ」

「わざわざ知らせてくれたんだね。ご親切にどうも」

お礼として途中で見つけた木いちごを手渡すと、リスさんは「ありがとう、お気をつけて」と言って器用に木の枝を渡って森の奥へと消えて行った。

「ふう……」

一つ息をはく。最近、悪意の精霊が現れ、悪さをするようになり、ウタカゼである僕たちが定期的に辺りを見回るようになった。

今日は悪意の精霊が現れなくて平和だった。それにたくさんの収穫ま

である。

「そうだ、ウタカゼの皆を夕食に招待しよう！」

みんな喜ぶだろうな。食いしん坊のエースなんてたくさんおかわりしたりして。そうと決まれば急いで帰ろう！

すると、

「サツツ〜！」

誰かに名前を呼ばれた。振り返ると金色の髪の毛をふわふわと揺らしながら、ウタカゼ仲間であるハニーが走ってくるのが見えた。

「どうしたのハニー？」

僕の元に辿り着いたハニーは、膝に手をついて肩で息をしている。

「た、たいへんよ。この先の川でナマズが暴れているらしいの」

「なんだって！」

「今はエースがなんとか食い止めているわ。すぐに来て！」

川は昨日の雨で増水しているはずだ……急がないとエースが危ない。

指でわっかを作り、それを口元へと運ぶ。

ピューッと指笛を吹くと、どこからかうさぎが跳ねてきた。僕の前で姿勢を低くしたうさぎに、素早く飛び乗る。

「ハニー、行くよ！」

そのままハニーの手を取ってうさぎの背中に乗せ、エースの元へと急いだ。

うさぎはピョンピョンと跳ねて木をかわしていく。体にかかる風圧がすごく、僕は思わず目を細めた。

「ハニーしっかりつかまって！」

「うん！」

前方から水が流れる音が聞こえてくる。木々の間から漏れる光が増えてきた。

「もうすぐ到着だ——」

次の瞬間、目の前に川が現れた。

そこに居たのは一匹の大ナマズと、増水によって狭くなった足場で斧を握るエースの姿。

この憎悪の嫌な感じ……それにナマズの瞳が赤い、やっぱり悪意の精霊によって悪しきものに変えられている。

「飛んで！」

僕が指示を出すと、うさぎは今までよりも大きく跳ねた。うさぎのジャンプはエースを越え、大きなナマズ

の頭の高さまで達した。

「やあああああっ！」

僕はうさぎの背中から飛んだ。目指すはナマズの頭上。

腰のホルダーから剣を引き抜く。上手くいけば一発で気絶させることが出来るかもしれない。

そしてうさぎの背中から飛んで、ナマズの頭上に剣を振り下ろす。命中したかと思ったが、ぬるぬると滑るナマズの体表が剣の軌道を逸らした。

僕はナマズの体をつたってなんとか岩場へと着地した。

隣ではうさぎの背中から降りたハニーが、エースの援護へと向かっている。

もう一度うさぎに乗ってナマズをじっくりと観察する。

丸まっている頭では動きが安定しない……そうだ、ナマズの広い背中なら攻撃があたるかもしれない！

うさぎのジャンプに合わせて、僕はナマズの背中めがけて飛んだ。またがるように着地したと思ったが、次の瞬間ナマズが大きく跳ねた

このままでは振り落とされると必死にしがみつこうとするが、ナマズの体はぬるぬるしていて手が滑ってしまう。

もうダメかと思ったその時、ナマズが跳ねるのをやめた。

「サッツ、今のうちだー！」

「私たちが動きを止めるわ！」

下を見ると、エースとハニーがナマズのヒゲに攻撃をしていた。

「わかった！」

僕は立ち上がって剣を握り、
「ごめん、すぐ楽にしてあげるから！」
そしてそのまま柄の部分振り下ろした。

ボカッ！ という衝撃音の後、ナマズがぐらりと体勢を崩した。

「う、うわあああっ」

足元が大きく揺れ、僕はそのままナマズの背中から滑り落ちた。この高さから地面に激突すれば大怪我は免れない。川に落ちたとしても増水しているから、上手く泳ぐことは出来ないだろう。

「くそっ、だめだ——」

怖さのあまり、僕はギュッと目をつむった。

地上ではハニーとエースが必死に叫んでいる。ごめん、皆。

しかし次に僕の体におとずれたのは、地面の硬さではなく、うさぎの柔らかい毛並だった。白くてふわふわした毛が、落下する僕を受け止めてくれたんだ。

「あ、ありがとう！」

何度も頭を撫でると、うさぎも応えるかのように耳を動かす。そして怪我をすることなく、無事地上にたどりついた。

「おーい大丈夫か、サッツ」

「怪我はないー？」

革の鎧に身を包んだエースと、手にパチンコを持ったハニーが走ってくる。僕は二人に向かって手を振った。

近くで倒れているナマズは気絶して目をまわしている。目が覚めた時には悪意から解放されて、また元の

生活に戻れることだろう。

「これで一安心だな。お前が来てくれて助かったぜ、サッツ」

「皆で力を合わせたから、悪意を追い出すことができたんだよ」

「チームワークの勝利ってやつね!」

僕の元にやってきたエースとハニーも、ナマズが悪意から解放されたのを感じたようだ。

皆の顔から自然と笑みがこぼれる。無事にウタカゼとしての使命を果たすことが出来た。

「なんだか安心したらお腹が減ってきたぜ」

「まったく、エースはご飯のことばかりなんだから……」

呆れた様子のハニーだったが『きゅるるるるる』と、お腹が可愛らしい

音をたてた。

ごぼごぼとせき込んで、お腹の音を隠そうとするがもう遅い。

「二人とも、今から僕の家に来ない？」

そうだ、戦いに夢中で僕がここに来る前に何をしていたのか、すっかり忘れていた。

「たっぷりのキノコが入った、シチューをごちそうするよ！」

僕たちは歌風の龍樹を目指して歩き出した。オレンジ色をした夕日が、長い影をつける。涼しい秋風は、これから来る冬を匂わせていた。

〈おしまい〉

©2013 小林正親

©2013 アークライト